

成田和信著

『幸福をめぐる哲学—「大切に思う」ことへと向かって—』(勁草書房、2021年)

おやさと研究所教授

金子 昭 Akira Kaneko

世の中には幸福を論じた哲学書はたくさんある。本書をそうした書物と思って手にした読者は戸惑うに違いない。というのも、本書の内容は幸福をめぐる言説の分析哲学的考察だからである。分析哲学は、言語分析を通じて概念の意味やその使用の明晰化を目指す哲学である。しかしそれは、私たちが幸福について具体的に考える際に、概念を明瞭に用いるという点でも参考になる。著者の成田和信氏は英語圏の哲学倫理学を専門とし、慶應義塾大学教授を経て、現在は創価大学大学院教授を務めている。

成田氏は、幸福について論議する際に、「どういうことが幸福なのか」と問う前に、「幸福とはどういうことか」を吟味することが大切だと言う。前者は個々の何事かが幸福になるのかを問うのに対し、後者は幸福という概念の意味を問う。前者の問題に答えるためには、後者についての共通理解が必要である。分析哲学の手法に慣れないと、概念やその語法を巡って議論がぐるぐると回るような感じがして、読者は目まいを起こしてしまうかもしれない。成田氏はそのあたりを考慮して、色々な例を出してくれる(それでも議論について行くには忍耐が必要だが)。

本書は2部構成となっており、まず幸福概念の意味を吟味する第1部「幸福とは、どのようなことを意味するのか」、そしてこの後に、どのようなことが幸福の実質的な内容となるかを扱う第2部「どのようなことが、幸福であるのか」が続く。

第1部では、最初に幸福について「ある人Pの幸福とは、Pにとって良いことが生じている、という事態から成る」とした上で、「～にとっての良さ」とは何かとか、この言明が端的な良さとはどう違うのか、またそうした検討結果を踏まえて人としての価値と「～にとっての良さ」との関係などが考察される。成田氏は、結論として幸福を構成する「～にとっての良さ」の意味を次のように定式化する。「XはPにとって良い=Pが人としての価値を備えているからこそ、我われは、Pのために、Xが実現するように振る舞うか、それが無理であれば、Xの実現を欲するべきである。」

第2部では、幸福の中身についての検討に入る。成田氏はこれまでに多くの哲学者が様々に提起してきた幸福学説を取り上げ、これらを一一つ論破していく。面白くなってくるのは第2部に入ってからだ(でも忍耐力が必要なのは変わらない)。ここで取り上げられるのは、①快樂説、②完成主義、③客観リスト説、④欲求充足説、⑤情動型評価説の5つであり、成田氏はこれらを個別論破した後に自らの幸福学説として、⑥ケア型評価説を提案する。

ここでポイントになるのは、これらすべては第1部で定式化した幸福(その人にとって良いことが生じている)の言語枠組みを踏まえて整理された幸福学説だということだ。例えば①快樂説の場合、快樂は常に「人にとって良いこと」である、すなわち快樂こそが根本的な幸福価値を持つ。また②完成主義だと、人間の本性を構成する性質や能力を発達させて発揮すること(人間としての自己完成)が常に「人にとって良いこと」である、すなわち人間の自己完成こそが根本的な幸福価値を持つと

いう具合だ。このほか、③客観リスト説は、「人にとって良いこと」を多数羅列する。そのリストには、知識、快樂、友愛関係、自律、徳を得ること、さらには身体能力、理性能力などを入れることができる。そういうリストこそが常に「人にとって良いこと」であり、根本的な幸福価値を持つことになる。そして④欲求充足説は、文字通り欲求の充足が常に「人にとって良いこと」であり、根本的な幸福価値を持つという考え方である。さらに、欲求の代わりに「喜ぶ」とか「満足する」とかいった心的態度を軸にして同様に考えるのが⑤情動型評価説である。成田氏がこれらの幸福学説を論駁していくプロセスを辿るのはとても興味深く、またそれが本書を読む醍醐味でもあるが、紙幅の関係のため本稿で紹介できないのが残念である。

成田氏自身が主張するのは⑥ケア型評価説である。ケア型評価説は、大切に思っている事態が実現することは常に「人にとって良いこと」であり、根本的な幸福価値を持つと定式化される。それは、幸福とは「大切に思う」という心的態度を軸に構成された幸福学説である。「大切に思う」は英語で care about であり、「大切に思う」ことは「大切なものと評価する」ことなので、この心的態度をケア型評価と称するわけである。この「大切さ」は、あくまでも対象を大切なものと思う本人にとっての大切さ(評価者相対的な大切さ)である。人がある対象を大切に思っている時、この対象にとって良いことが起これば喜び、悪いことが起これば悲しみ、またそれに良いことが起これば期待を抱き、悪いことが起これば危惧を抱く。対象をめぐるそうした情動や欲求や注意に関する諸々の性向は秩序だったものであり、成田氏はそれを「ケア心情ネットワーク」と呼ぶ。ケア心情ネットワークが形成されるがゆえに、その対象は大切なものとして認識されるとも言えるのである。

しかし、人が洗脳や教化、催眠術などを通じて「大切に思う」という心的態度を獲得した場合、対象となる事態が実現しても、その人の幸福は増えることはない。その意味で、心的態度の獲得過程に対する是認ないし納得といった肯定的な姿勢が重要となる。そこで求められるのは一定の理性的能力である。成田氏は幼い子供や認知症患者の例を挙げ、「獲得過程による批判」に対するケア型評価説の課題を率直に認めている。しかし、さらに言うならば、たとえ高度な理性的能力を持っていても、心的態度は自覚なく変容を被ることがあるし、どんな人にも無意識の内の刷り込みは見られる。例えば、宗教を信じることで人は幸福になれるだろうか。本書では扱われない問いであるが、読者は本書を通じて得られた知見を踏まえながら、こうした問いについて色々と考えてみると面白いだろう。

